Chapter 26 : **野良猫の転機**

血と汚れにまみれた身体を掃除しながら、ゼラオラは後悔と屈辱に打ちひしがれていた。その悪臭は、レックウザの蘇生の失敗から、ティンカトン判事に半ダースもボコられた屈辱まで、すべての敗北を思い出させた。  
世間では、彼のことを陰で「歩く敗北」と呼んでいた。

限界を超えたゼラオラは、無言のまま川辺へと足を運び、虚ろな目で水面を見つめた。彼は小さく何かを呟き、飛び込んだ……終わらせるつもりで。  
だが水は彼を受け入れなかった。  
ボランティア救助隊の一員として川を巡回していたラプラスは、反射的に跳躍中のゼラオラに気づき、咄嗟に川面全体を凍らせた。冷たい氷の板に変わった川面に、ゼラオラは鈍くぶつかり、そのまま意識を失わずに生き延びた。

数分後、ラプラスの発した救難信号を受けてスイクンが到着した。穏やかで落ち着いたスイクンは、悲惨な状態のゼラオラの隣に腰を下ろし、最初は何も訊かなかった。ただ沈黙が流れた。  
やがてスイクンは彼にひとつの提案をした。地元の公園区でのアイスクリーム売りの簡単な仕事だ。

「喜びを運ぶの。小さくても、それが贖罪の始まりよ」とスイクンは言った。

ゼラオラは拳を握りしめ、怒りに任せてその提案を拒絶した。

「ガキどもに笑顔なんて配ってたまるかよ」と吐き捨てて去っていった。

次に彼が現れたのは、裏路地だった。古びたイッシュ風の屋台から安物の薬と闇酒を売りさばいていた。だがそれも長くは続かなかった。  
夕方のパトロール中だった武道警察官バシャーモが、ちょうどその現場に通りかかり、取引の真っ最中に捕まえたのだ。

ゼラオラはとぼけた様子で言った。  
「はいはい、見つかったよ。次はフライドチキンでも売るわ」

バシャーモは無表情で返した。  
「お前がフライドチキンだ」と言い放ち、そのまま手錠をかけた。

再び法廷へ引きずられていったゼラオラだが、今回ティンカトン判事は一言も喋らせなかった。ひと目見ただけでハンマーが振り下ろされ――ゴンッ。今週3回目のボンクだった。

罰として、ゼラオラは地域奉仕活動を命じられた。フレアロンの学校の外壁掃除だ。  
まだ失意の臭いを漂わせながら、コミュニティベストを着たまま、足元には風に舞うアイスクリーム売りのパンフレット。

図書館を改装したランチルームから、ラベンダータウンの不気味なBGMが響き渡る。カントー出身の若いイーブイ三匹――フレアロン、シャワーズ、サンダースが休み時間にインディーゲームのホラールートを始めたのだ。  
彼らのPCスピーカーの音量が高すぎて、怪しげな旋律が開いた窓を通してゼラオラの掃除場所まで届いてしまった。

ゼラオラの身体がビクッと震えた。  
その旋律は、郷愁と恐怖と屈辱が入り混じった本能的な記憶を呼び起こした。  
彼はそっと窓の方へ忍び寄り、中を覗き込みながら三匹を睨みつけた。まるで嘲笑われているかのように感じたのだ。  
怒りで体から湯気が立ち上る。「またあのガキどもか……」と呟き、モップを武器のように片手に構えたまま、教室へ突入した。

だが不運なことに、近くで体育のドリルを指導していたガブリアスが、その足音を「地面タイプの暴走」と誤認した。即座に地面を叩き、局所的なじしんを起こす懲罰行動を取ったのだ。  
その衝撃波はゼラオラを吹き飛ばしただけでなく、フレアロンとサンダースにも直撃してしまった。  
椅子はひっくり返り、トレイが飛び、ラベンダーの旋律は歪んだノイズに変わった。

シャワーズは一瞬驚いたものの、すぐに冷静さを取り戻した。  
彼女は的確に、しかし破壊的ではないサーフを呼び出し、教室中に水を流して揺れを抑え、混乱を沈めた。

ゼラオラは隅っこで水浸しになり、バケツの山に半ば埋もれながら呆然と座っていた。  
サンダースは倒れた机の下でうめき、フレアロンの体毛は静電気で逆立っていた。  
シャワーズはただため息をついた――最近では、彼女がこの日常の「平和担当」であるのは当たり前のようになっていた。

腕を組み、尻尾を小刻みに揺らすガブリアスは、水浸しで茫然自失のゼラオラを見下ろした。

「お前には、もはや罰だけじゃ足りんようだな」とつぶやき、ゼラオラの首元を掴んで引き起こす。「しつけってもんが必要だ」

それだけ言うと、彼はゼラオラを無言で連れて学校裏の竹林へと向かった。  
そこはウーラオスが主宰する「黙想武道塾」のある静寂の地だった。  
木の葉が舞い落ち、せせらぎが流れる中――ウーラオスは蓮華座のまま静かに座っていた。

「こいつ、今日からそっちのだ」とガブリアスが唸るように言い、ゼラオラを前に押し出した。

ウーラオスは片目を、次にもう片方の目を開けて、びしょ濡れで打ちひしがれたゼラオラを静かに見つめた。  
しばらく何も言わず、ただ立ち上がって奥の林へと歩いていった。  
ゼラオラは戸惑いながらも、その背を追った。

混乱だったものは、やがて畏敬へと変わっていった。  
毎日、彼は呼吸法、武道訓練、滝の下での精神統一を学んだ。  
ウーラオスは一度も声を荒げなかった。必要なかったのだ。  
その揺るがぬ静かな存在感は、徐々にゼラオラの混沌を削り取っていった。

いつしかゼラオラは、他の問題児たちの指導を手伝うようになっていた。  
握りしめていた爪は怒りではなく、落ち葉を掃き、生徒のフォームを直し、夕暮れの瞑想時間に茶を出すために使われるようになった。

もう彼は、怒鳴り、荒れ、ふざけてばかりの存在ではなかった。

彼は――彼のままで、少しだけ、良くなっていた。